

特集 比較文化研究

はじめに

西 川 長 夫

比較文化研究会は立命館大学の課題別研究会の一つとして、立命館大学国際言語文化研究所に事務局を置いているが、何よりも「開かれた研究会」を目指して、参加者の身分や資格を問わず、その時々テーマや報告に関心のある人であれば、学内、学外、教員、職員、学生、その他あらゆる人々の自発的な参加を歓迎しており、したがって参加者の数も多い。1名の代表者（現在は国際関係学部夏剛教授）を置く以外は、特別の組織をもたないので、企画や運営、会報の編集（現在15号が出ている）などはボランティアが当たり、この数年は主として立命館や他大学の院生の方々にお願いしてきた。そうした会の特色は、毎回の特集の内容にも表れていると思う。

今回は図らずも、修士課程を終えたか、博士論文の作製に専念している若い研究者たちの力作論文の特集となった。

冒頭の長谷川秀樹さんの論文「生成される「少数言語」」は、もともと明確な形では存在しなかった「コルシカ語」が形成される過程の社会言語学的な分析を通して、近代国民国家における民族やエスニシティの問題に鋭く迫っている。この論文は本年3月末に提出された課程博士号請求論文の一部をなすものである。

崔博憲さんの「タイ山岳民族と開発」は、「山岳民族」アカ族の長期にわたるフィールドワークを基に、資本主義と国民統合が強化されてゆく時代のなかで、少数民族がそうした流れにいかに対応しているか、そのしたたかな生き方を描きだしている。周辺部の開発や少数民族を対象にした人類学的、社会学的研究が、その地域や住民にとっていかなる意味を持っているかという、現地の住民の側に立った倫理的方法論的反省が、この論考の基調をなしている。

菅原慶乃さんの論文「『中国文化論』に見るナショナリズム言説」は、1980年代の中国における《文化フィーバー》の綿密な分析であり、ナショナリズムの一形態としての「文化論」が見事に分析・考察されている。新興国家の国民統合の過程におけるこのような「文化論ブーム」は、これまでも「国民文化」や「国民文学」などさまざまな形態を伴って各地で観察されるものであるが、それがわれわれの身近な、しかも

中国という超大国における現象であるだけに衝撃も大きいと思う。

全且煥さんの「陸羯南の国際観」は本学国際関係研究科に提出された修士論であるが、きわめて問題提起的で魅力的な論文であり、書庫に埋れさせておくのは惜しいので、この特集に収録させてもらうことにした。丸山真男によって「進歩性と健康性をもった明治20年代の日本主義運動の最も輝けるイデオログの一人であり、日本の近代化の方向に対する本質的に正しい見透しをもち……」と評された陸羯南が、こと韓国と中国にかんしては驚くべき人種的偏見と自民族中心のナショナリズムに走ってゆく様を、この論文は容赦なく描きだしている。そしてこの陸の実例は、現在の韓国や第三世界のナショナリズムの再考をうながさざるをえないのである。

高野晃一さんの「カナダ多文化主義の思想と政策」は、高野さんの修士論文からの展開で、博士号請求論文の一部を構成することになるはずである。幾度かカナダを訪れて資料収集を行った後に執筆された力作論文で、カナダの多文化主義にかんして広く伝えられているいくつかの誤りや誤解が正されることになるであろう。高野さんは、社会人としてある企業を定年退職後、学問の道を志し、学部から修士課程を経て現在は博士課程に在籍している。すでに65歳を越えた、私より年長の高野さんを少壮の研究者扱いにするのは礼を失すると思うが、ここでは若い研究者に混って新しい道を切り開きつつある高野さんの意図をくんで、あえて若い研究者と呼び高野さんの挑戦に拍手を送りたい。

以上の5篇の論文に目を通された方は、それぞれ異なる領域とテーマを扱った論文でありながらも、そこに最近の若い研究者に共通した新しい問題意識が流れていることを読みとっていただけるのではないかと思います。いずれも問題意識の鮮明な優れた論文ではあるが、若い研究者の論文であることを考慮して、それぞれの領域の専門研究者に前もって読んでいただき、その助言に従って執筆者には推敲や書き直しをお願いした。

西川長夫の「1968年5月 ― 消えない言葉」は、本文で説明しているように、ちょうど30年前、私がまだ若かったころ、留学していたバリで書いた文章である。この特集が若い研究者の論文を集めることになったのを機に、30年前の色あせた未発表原稿を取りだして、あえて載せていただくことにした。まことに幼稚な文章で恥ずかしいが、ひょっとしたら現在の若い研究者たちがこれを読んで自分の知的水準に自信をもつような効果があるかもしれない。もちろんいわゆる「5月革命」から30年をへて、1968年の歴史的今日的な意味を改めて考えてみようという、呼びかけの気持ちもある。

書評としては今回は生田美智子著『大黒屋光太夫の接吻』（平凡社選書、1997年）を取りあげさせていただいた。生田さんは比較文化研究会の古いメンバーであり、この書物の第2章と第7章は、それぞれ『立命館言語文化研究』の第7巻5・6合併号と第6巻第3号に掲載された論文をもとに書かれている。すでに多くの書評も出て高く評価されている著作であるが、本学には奥村剋三先生のような、この書物の読み手としてはおそらく最高のロシア研究者もいることであり、ぜひ御意見をうかがいたいと思って書評をお願いした。きわめて多忙な時期に快くひきうけていただけたことに感謝したい。

最後に本号の発行が研究所内外のさまざまな事情によって大幅に遅れ皆様に御迷惑をおかけしたことを、研究所の責任者としてお詫びしたい。

1998年4月10日

西 川 長 夫